

---

# ノーゲリング・ハー

和清

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノーゲリング・ハー

### 【Nコード】

N2649M

### 【作者名】

和清

### 【あらすじ】

十九世紀末のイギリス。産業革命に沸き立つ時代。

北部、湖水地方に位置する名も無き田舎町には、美しい森と湖に囲まれた古い屋敷があった。所有者は、七百年以上続く貴族家『ベルグソン』。

ベルグソン家には、妖精と見紛うばかりの美しい兄妹が住んでいた。長男アイン＝ベルグソン（十歳）と長女ミリカ（六歳）である。

しかしその朝、屋敷は大騒ぎになっていた。二人が朝から見当たらないのである。その上、家の主は留守中。老執事モリアンは、使用

人達を総動員して兄妹を探し回る。そんな時、兄妹の世話役であるメイドのメアリーが、地下に封印されている伝説の魔物『ノーゲリング・ハー』の封印の扉が開かれているのを発見する。  
更に騒然となる屋敷。

だが、ベルグソン家と『ノーゲリング・ハー』には、大いなる秘密があつたのだつた。

## プロローグ

### プロローグ

冷たい石の壁に掛けられたランプの中で、薄いオレンジ色の炎が揺らめいていた。

照らしだされていたのは、冷たく暗い石造りの回廊、突き当たりに備えられた重苦しい取っ手の無い鉄の扉、そして、その扉の前でキスを交わす一組の男女の影……

静かに重なり合っている二人は互いにフードの付いた黒いマントに身を包み、そのキスは、この世の終わりでも来るのではないのかと思うほどに深かった。

男性の方は、顔に深みは現れているものの、青年期の面影がそのまま残っている若々しい顔立ちをしていた。面持ちは柔らかく人柄の良さが伺えたが、それは軟弱という印象ではなく、優しさと精悍さを兼ね備えたものであった。

女性の方には、年齢不詳の美しさがあった。才色兼備を伺わせる気品に満ち溢れたその顔立ちは、誰をも魅了する女性本来の美しさが備わっている。だが、もっとも目を惹くのは、人間の物とは思えぬ程に美しい、その黄金色をした長い髪であった。ランプの明かりだけが照らすこの仄暗い場所で、それは月のように輝いている。

何かの時間<sup>とき</sup>が来たかのように、二人は同時に唇を離れた。最初に口を開いたのは男性の方だった。

「こんな場所で見ると、君の髪は一層輝きを増すな。綺麗だよ」  
「ベルグソン家の女の誇りですもの……」

女性は綺麗な微笑を湛えて答えたが、その微笑は男性から視線を外すと同時に、皮肉を浮かべる笑みに変わった。

「……いえ、呪いの間違いね」

「呪いならば、私は例えこの身に変えても君を守る事を約束しよう」

「初めて出会った時も、貴方はわたくしにそう言ってくれたわ」  
「未来永劫、そのつもりだ」

男性は女性を静かに抱き寄せ、女性は男性の肩に顔を埋めた。だが、縋<sup>すが</sup>りつく様子は見せず、直ぐに女性はこんな言葉を呟いた。

「行かなければ……」

女性は顔を上げると同時に、男性に背中を見せる。その背中からは、ある種の固い決意が伺えた。男性はその背中を見詰め、険しい顔で再びのように問いかけた。

「本当に良いのだね？」

女性は背中を向けたまま答える。

「今やこのイギリスは産業革命に沸き立ち、この十九世紀も終わりを迎え、時代は新しい夜明けを迎えようとしています。ベルグソンの忌まわしい歴史はここで終わらせましょう。まだ幼いあの二人にとつては、とても辛い試練になるかもしれないけれど……」

「君にとつても……じゃないのか？」

「わたくしには、貴方が居ますもの……」

「信じてくれるのだね、嬉しいよ」

男性は微笑んで女性の手を握ったが、女性は振り返らなかった。

ただ、女性の頬には煌<sup>きりり</sup>く物が流れ落ちるのが見て取れた。

女性はそれをそっと拭い、そして、ノブの無い重苦しい鉄の扉に右手を翳<sup>かざ</sup>した。

「ベルグソン家当主の名において、今ここに我はノーゲリング・ハ  
ーの扉を開く」

同時に女性の右手から赤い光が放たれ、重苦しい鉄の扉は音も無く開いた。

「行きましょう」

「願わくば、あの子達に神のご加護があらんことを……」

女性は、男性に握られていた手を強く握り返し、男性は左手で小さく十字を切った。

そうして男女は、鉄の扉の向こうに広がる闇の中へと消えていっ

たのだった。

## 使用人たち

レース編みのような霧のカーテンを朝の日差しがゆっくりと開けて、その真珠のような輝きを放つ湖は姿を現した。鏡のように透き通った水面に写るのは、晴れ渡った青空と新緑の森、そして、古めかしくも輝きを失っていない彫刻のように整ったベルグソン家の屋敷であつた。

森から飛んできた様々な色合いの小鳥達は、屋根に羽を休め屋敷を彩る。さえずりは屋敷に住まう者達に優しく、陽気に朝の訪れを教えてくれる。ベルグソン家の屋敷は、いつものように楽園のような朝を迎える。

……はずであつた。

「まだ見付からんのかぁ！」

湖を丸ごとひっくり返してしまうのではないのかと思うほどのその怒声は、屋敷を震わせ、屋根の小鳥達を一斉に森に叩き返した。屋敷の玄関や裏口からはエプロン姿の掃除人や洗濯人、コックなどの使用人達が慌てふためきながら飛び出してくる。屋敷より少し離れた場所からは、皮のつなぎを着た厩番の者が、庭師が綺麗に刈り込んだ敷地の芝生を踏み荒らしながら走り回っていたが、当の庭師も刈り込みバサミを片手に自ら芝生を踏み荒らして走り回っていた。今朝のベルグソン家は、まさに戦場のような様相を呈していたのである。

「落ち着いてください、モリアン様。そう興奮なされてはお体に障ります」

若い使用人は、その大きな体に見合った厳つい顔を情けないほどに崩して、自分がモリアンと呼んだ目の前の黒服の老執事を宥める。

だが、モリアンはそんな言葉に逆に興奮したように、

「ピーター！、これが落ち着いていられようかつ！」

と、若い使用人、ピーターに怒鳴り返すのだった。

このモリアンという老執事、長年に亘ってこのベルグソン家に務めており、<sup>よわい</sup>齡は七十を超えるところに、その年齢を示しているのは、顔に寄った無数の皺だけ。声は先程通りの迫力で、ピーターのような若者がその大きな体を丸めて萎縮してしまうほど。そして、背筋などは分度器で測つても一度のズレも無いのではないのかと思うくらいにピンと伸びている。身に纏った黒服から醸し出されるその威厳と迫力は、まさに執事の鏡と言つても過言ではないくらいの老執事だ。

そんな老執事は怒鳴つたと思つたら次には大きな溜め息を吐き、頭を抱えてブツブツと言ひ出した。

「最近は大入しいと思ひ、油断しておつた。アイン様といい、ミリカお嬢様といい、あのご兄妹<sup>きょうだい</sup>には本当に手を焼かされる。しかも、よりにもよつて奥様と旦那様がお歸りになられる今日という日に……」

すると、ピーターが恐る恐る尋ねた。

「あの、奥様と旦那様はいつお戻りになられるのですか？」

「手紙には、三時のティータイムは自宅で過ごしたいと書いてあったから、恐らくはそれまでには……」

そこでモリアンは再び声を張り上げた。

「ええい！、貴様も早く探しに行かんか！。庭から湖、森、必要とあらば町までくまなく探してこい！、もしお二人に何かあつたら我らの首が飛ぶだけではすまんだぞ！」

「は、はい！」

ピーターは慌てふためきながら玄関へと駆け出した。が、直ぐにモリアンが何かを思い出したかのように発した「ちよつと待て」という声に呼び止められたのだった。

「はい、なんでしょう？」

「メアリーはどうした？。お二人の姿がベッドから消えている事を最初に報告したのはメアリーだ。しかし、それから姿が見えん」

「メアリーさんなら、心当たりがあるとか言つて、我々とは別行動



をしています、何処を探しているかまでは……」

「心当たり……？」

モリアンは分からない顔を見せる。しかし、直ぐに何かに気付いたように声を上げた。

「まさか、あそこに……！」

モリアンはこの上も無く目を見開いた。額には、薄っすら脂汗が滲んでいた。

深淵の闇へと続く冷たい石造りの回廊。地下へと続くその闇は、荘厳なる闇とでも言おうか。それは不気味さを通り越し、ある種の神秘的なもののすら感じさせた。

そんな闇の奥へと、手にした仄かに灯るランタンの小さな明かりだけを頼りに回廊を下って行く華奢な人影があった。

「この場所には近付きたくないのになあ……」

華奢な人影は、本当に嫌そうな声色でそう呟きながらも、奥へ奥へと回廊を下りて行く。

薄っすらとランプの明かりに照らし出されるその姿は、白いレースのブルボンネットを被り、身に纏った足首までの黒いワンピースには純白のエプロンを掛け、足には黒いパンプスを履いている。この神秘的な闇には余りにも不釣り合いなそれは、どこからどう見ても女中である。それがメアリーだった。

「アイン様！、ミリカお嬢様！、居たら返事をしてください！」

メアリーの仕事は現在探している二人の世話役であったが、年齢は十八歳と随分と若かった。顔のそばかすと束ねた赤毛が実際の年齢より更に少女のような可愛らしさを醸し出していた。

「まったくもう！、もし本当にここに居るなら、今日こそはとつちめてやらないと！」

そう言うメアリーの顔は、メイドと言うより姉のような顔をしていたが、ふと立ち止まると、またメイドの顔に戻り呟いた。

「……いいえ、無理ね。あのお二人を叱るなんて……故郷の弟達を

叱るようにはいかないわよね……」

メアリーは首を横に振って溜め息を吐いた。

と、その時だった。前方の闇の中で、カタカタ、と小さな物音が聞こえた。その瞬間、メアリーは反射的に後ろに飛び退いた。いや、それは飛び退いたと言うより、跳躍したと言った方が正しいだろう。その華奢な体のどこからそんな跳躍力が飛び出したのか、メアリーは後ろを向いたまま階段を十段以上飛び越える跳躍を見せたのである。そして、着地と同時に身構えるその顔は、先程見せた姉のような顔でもなければ、ましてやメイドの顔でもない。殺気立ったその目付きには、すでに少女の面影など微塵も無かった。

だが、そんなメアリーの目の前に闇の中から現れたのは、一匹の小さな野ネズミだった。野ネズミは何食わぬ顔でメアリーの横を駆け抜けて行った。

「もう……驚かせないでよ……」

同時に、メアリーからはそんな安堵の息が漏れる。そして……

「えっ？、ネズミ？、キヤー！」

今更である……

少女らしい悲鳴と共にメアリーはその場に尻もちをついた。俯き、身を強張らせるメアリー。だが、それも束の間、メアリーは何を思ったかその身を震わせたかと思うと、怒りを露わにした顔をガバツと上げ、立ち上がった。

「もうっ、イヤッ！」

自分の頭の中で何かが切れる音を聞きつつ、暴走する馬車馬のような勢いで闇の奥へと駆け下りて行った。

「アイン様！、ミリカお嬢様！、出てきなさい！。ここに近付いてはいけないと何度も言っただけです！、今日という今日は絶対に許しません！、お説教です！」

鼻息も荒く駆け下りてゆく。怒りに身を任せる、というのはこういう状態の事を差すのであろう。

そうして、回廊の突き当たりに差し掛った時であった。

「さあ、観念しなさい！、ここに居るのは分かって……」

そこでメアリーは言葉と足を同時に詰まらせた。目の前に見えたのは、開け放たれている重苦しい取っ手の無い鉄の扉。

「うそ……ノーゲリング・ハーの扉が開かれている……！」

次の瞬間、メアリーは鬼気迫る表情で扉の向こうの闇へと飛び込んだ。

「アイン様！、ミリカお嬢様！」

しかし、そこに広がっていたのは何も無いランドウの空間であった。四方を囲むレンガの壁が全ての音を吸い込んでしまいそうな無音の場所。だが、その場所にメアリーは後退ってしまうほどの戦慄を覚えたのだった。

「そんな……まさか……！」

メアリーは全速力で地上へと駆け上がって行ったのだった。

## 妖精

初夏の麗らかな木漏れ日が差し込む新緑の森。その森を抜けると、目の前には御鏡のような水面をした美しい湖。それらは全てベルグソン家の所有物、敷地であった。しかし、古くからベルグソン家はそれらを市民達に開放していた。したがって、湖畔を二十歳そこそこの若いカップルが歩く姿など珍しくもなかった。

肩を並べて歩くそのカップルもやはり若く、二十歳くらいに見えた。

男性の方は身長が高く、長めの金髪をオールバックに綺麗に揃えている。目鼻立ちのハッキリした精悍な顔立ちは、身に纏ったスーツと相まって好青年の印象を与えた。

そんな男性の雰囲気とは対照的に、女性の方には、性別を問わず魅了してしまうような艶っぽさがあつた。服の上からでも分かる見事なまでのプロポーション、肩まで伸ばした光沢のある美しい黒髪が更なる艶やかさを醸し出し、掛けている銀縁のメガネも、生真面目そうな雰囲気と相まった妖しさがある。だが、身に纏ったフリルの付いた絹の白いワンピースが貴婦人然とした雰囲気を保っており、そこには下品な色気など微塵も無かつた。

そんな二人は、この美しい湖のほとりを歩きながらロマンチックに愛の言葉を囁き合っている……

……ようには見えなかった。

並べて歩く肩は互いに上下して同じように呼吸を整えている。よく見れば、靴やズボン、スカートの裾は土に汚れており、服も所々綻びていた。

明らかに何かから逃げてきたようであつた。

「撒いたか？、シェリル」

「恐らくは……」

「こんな北部の湖水地方まで追いかけてくるとは、さすがに不意を

突かれたな……恐るべきは大英帝国の誇るロンドン市警と言ったところか。所轄の警察署にまで協力を仰いで捜査網を敷くとは、仕事熱心な事だ……」

「……ところでグレック様、お怪我はありませんでしたか？、この森に逃げ込んだ時、木の枝などに手足を引っかけられていたようでしたが……」

「こんなもの、怪我の内に入るものか。それよりもシェリルの方こそ大丈夫だったか？。我が愛する妻の柔肌にキズでも付いたら一大事だ」

「嬉しい、心配してくださるんですね。愛してますわ、グレック様」  
「俺もだよ、シェリル」

二人は手を取り合う。

訂正、一応愛も語り合っていたようである。

そんな時だった。突然グレックは自分の胸の中にシェリルを抱き寄せると、そのまま近くにあった木の陰に入り、その身を伏せた。

驚くシェリルより先に、グレックは森の中の様子を伺いながら小声で口を開く。

「人の気配がする……」

「ヤツラでしょうか……？」

「わからない……しかし、連中を撤く途中に聞いたヤツラの言葉、憶えているか？」

「はい。ベルグソン家の敷地に逃げ込まれた、面倒な事になった、とか……」

「ベルグソン家などという家名は知らないが、いずれにしろ連中にとってはこの土地は面倒な場所だということ。それでも追いかけてきたというのか？。我らをコソドロ扱いしておきながら、そのコソドロ相手にしつこい事だな。しかも愛を語らっている時に現れるとは、なんとも無粋な連中だ」

「まったくですわね」

盗人猛々しいとは、まさにこのこと。

しかし、感じたその気配はどうやら警官達のものではないようであった。

シエリルはグレックの胸から顔を上げると、グレックとは逆の方向の様子を伺う。その途端である。シエリルは金魚のように口をパクパクさせてグレックの肩を大きく揺さぶった。掛けている眼鏡まですずれている。

「どうしたそんなに慌てて。美人が台無しだぞ……」

呆れた顔で言うグレック。確かに言葉通り、先程までの艶やかさなど跡形も無いほどの慌て振りであったが、本人はそれどころではないようである。

「よう……よう……！」

シエリルは手をぶんぶん振り回し、何かを伝えようとしていた。

「まあ、とにかく落ち着いて話せ」

「妖精が……そこに妖精がいました……！」

「ハア？」

突拍子も無いその言葉に、グレックの声は思わず裏返った。こちらにも色男が台無しである。

「まてまてまて、落ち着くんだシエリル。新時代の幕開けを告げる産業革命華やかなるこの時代に妖精など居てたまるものか。一体、何と見間違えた？」

だが、シエリルはぶんぶんと首を横に振る。何も見間違えてないと言いたいようだ。困った顔を見せるグレックだったが、仕方なくシエリルが見ていた方向に目を凝らした。

最初に見えたのは、森の中を木から木へと移動するサファイアのように美しい青色の光だった。更に、その青色の光の中には、微かだが金色の光が混じっていた。二つの光は尾を引きながら移動している。さながら光り輝く青空を黄金の蝶が金粉を蒔きながら飛んでいるようであった。

「なんだアレは……？」

生い茂った緑が影となり、どうも姿形が良く見えない。グレックはそつと森に足を踏み入れ近付こうとした。その時、グレックは確かに見た。ほんの一瞬であつたが、世にも美しいその顔を。子供であつた、という以外は少年か少女かも分からなかつたが、何を見たかと問われれば、妖精、としか答えようのない、それほどに美しい顔を……

グレックは、声も無くその場に立ち尽くす。そして、木に凭れ掛かり頭を抱えた。

「疲れているのか……それとも我らは本当に妖精の森に迷い込んでしまったのか……」

と、不意に二人の背中に幼い少女の声が掛かった。

「何をしていらつしやるの？」

驚きながらグレックとシェリルは同時に振り返る。そして、再び立ち尽くした。

そこに立っていたのは、フランス人形のドレスのような白いワンピースを纏った六歳くらいの肌の美しい白い少女であつた。艶のある美しい金髪を肩まで伸ばし、頭には青いリボンを付け、それは木漏れ日に照らされてキラキラと輝いている。特徴的な長いまつげと大きく青い瞳、小さな胸にはクマのぬいぐるみを大事そうに抱え、目をぱちくりさせながら不思議そうにグレッグとシェリルを見詰めていた。

「なんて綺麗な子なの……」

「確かにな……妖精と見紛うばかりの美しさだ……」

二人は続けて感嘆の声を漏らした。

だが、次の瞬間には、そんな感嘆の声すら出ないほどの出来事が起こつたのだつた。

「あつ、ミリカ。そんな所に居たのか」

「アインお兄様！」

森の中から、やはり子供のものと思われる細い声が響いたかと思

うと、ミリカと呼ばれた少女は嬉しそうに声を上げた。同時に森の中から十歳くらいの少年が……いや、少女の口から『お兄様』という言葉が聞かなければ少年だという事すら分からなかった、それほど美貌が姿を現したのだった。

人のものとは思えぬほどに美しい色をした黄金色の髪の毛。目は大きく、青い瞳はまさに宝石。慈愛に満ちているような優しい目元は、表情を浮かべなくても微笑んでいるように見える。次いでずらりと通った鼻筋、ふつくらと柔らかそうな桜色をした唇。小さな顔は、まだ幼い子供だと言うのに既に八頭身の体系を保っている。

二人はそっくりだったが、美貌という点だけを言えば間違いない少年の方が上であった。

グレックは、まるで神の御業を目撃してしまったかのような表情で立ち尽くし、シェリルなどは一瞬茫然とした後、膝を地に付けてその場に崩れ落ちた。

そして、二人は同時に思うのだった。

ああ、なんたる不幸だろう。こんなものを見てしまったら、これから先の人生、何を見ても美しいという言葉が使えなくなってしまうかもしれない……

しかし、人生の喜びと絶望を同時に味わってしまったそんな二人の事などをよそに、その兄と妹はマイペースに会話を続けるのだった。

「もう、ミリカったらダメじゃないか。僕の手を離しちゃいけないよって、あれほど言ったのに」

「ごめんなさい。でも、ムームーがこっちに行きましょっていうものだから……」

少女ミリカは、胸に抱いていたクマのぬいぐるみを兄に掲げた。ムームーとは、どうやらその名前のようにであった。

「またそれか。もう……」

兄である美貌の少年アインは、呆れた顔をミリカに向けたが、「それじゃあ、これからはムームーが何を言っても僕の手は離しち



やいけないよ」

と、世にも美しい笑顔を妹に見せた。ミリカもニツコリと、兄に劣らぬ美しくも無邪気な笑顔を浮かべてコクリと頷いた。

アインが、立ち尽くすグレックと崩れ落ちているシェリルに気が付いたのはそれからであつた。

「あれ？、この御仁達は？」

「お見かけした事の無い方達でしたので、お声を掛けていたところなの」

二人の美しい兄妹に見詰められ、シェリルは今や失神しそうなくらいの目眩を覚えていた。そんなシェリルの体を支えてやりながら、グレックは小さく呟く。

「美は時として毒になるというが……我々は本当に妖精の森に迷い込んでしまったようだな……」

そう言われても兄妹はキョトンとしていた。どうもこの兄妹、自分達の美貌をまったく自覚していないようである。アインが不思議そうな表情のまま言う。

「いいえ、この森は妖精の森ではなく、当ベルグソン家が所有する森です。町の方たちには、美しい森、と呼ばれ親しまれております」  
「確かに、ここは美しい所だな。森も湖も……もっとも、君達兄妹の美しさには敵わないが……」

「よく言われます」

アインは微笑んでそう答えた。どうやら言われる事には慣れているようである。しかし、自覚が無いものだから自分の微笑みが他者に与える影響というものを考えていない。シェリルだけではなく、グレックまでも目眩を覚えそうになり体をふらつかせた。すると、心配そうにミリカがグレックに声を掛けた。

「大丈夫ですか……？」

「いや、大丈夫。優しいのだね、君は」

グレックにそう言われると、ミリカは妖精どころか天使のように可愛らしい照れ笑いを見せた。咄嗟にグレックは足をふんばった。

そしてアインは、ふと思い出したように自己紹介をしたのだった。  
「あつ、申し遅れました、僕はベルグソン家長男、アイン」ベルグソンと申します。こっちは妹のミリカです」

「ミリカです」

ミリカはワンピースの裾を小さくつまみ、可愛らしく挨拶した。  
アインが不思議そうな顔を作りグレックに質問したのは、それからだった。

「あの、ところで、この辺りではお見かけしないお顔ですが、ここで一体何をしていらっしゃったのですか？」

アインにそう訊かれ、グレックとシェリルはやつと自分達が現在置かれている状況を思い出して我に返った。

さて、どう答えたものか……

グレックは笑顔でごまかしつつ、思案を巡らせた。だが、グレックが何かを言う前にアインは声を上げたのだった。

「あつ、わかりました。御二方はここでオニゴツコしてらっしゃったのでしょうか？」

「えっ？」

グレックは思わず呆氣に取られた。同様にシェリルもポカンと口を開ける。だが、アインは嬉しそうに言葉を続けた。

「そうですね、だから服もそんなに綻びているのでしょうか。僕達兄妹も、この森で良くオニゴツコやかくれんぼをして遊ぶのです。それで服を汚してしまってメイドのメアリーによく怒られています」  
アインは少し照れた笑いを見せ、グレックは思わず苦笑を浮かべた。

これはまた、子供とは言え随分と世間知らずのお坊ちゃんだな……まあ、ヘタな嘘をつかずに助かったか……

「お楽しみのところを失礼しました。こんな何の特徴も無い田舎ですから、観光に訪れる方もいませんし、僕もミリカも他所から来た方というのが珍しくて。もうお邪魔はしません、どうぞこの森で楽しんでいて下さい」

そうしてアインは、一人で納得してミリカの手を引きその場を立ち去ろうとした。しかし、そこでミリカは困った顔を浮かべて兄を引き止めたのだった。

「お兄様、大事な事をお忘れではありませんか？、いまここは……」  
ミリカがそう言い掛けたところで、アインは慌てたように大きな声を上げた。

「あつ！、そうだよミリカ！、僕としたことがこんな大事なことを忘れているなんて！」

一度向けた背を再び戻し、アインは更に慌てたようにグレックとシェリルに言った。

「楽しんでいたところを申し訳ありませんが、今この森は危険なのです！。当家の手違いにより今この森には封印されていた魔獣『ノーゲリング・ハー』が解き放たれてしまっているのです！」

そこでミリカが、不思議そうな顔を兄に向けた。

「お兄様、ノーゲリング・ハーは悪魔ではなかったのですか……？」

「いや、魔獣の方がカッコイイと思ってさ」

カッコイイとか、そういう問題ではなさそうなのだが……

ミリカは、また困った顔を浮かべた。

兄妹がそんな奇妙な会話を交わしている時だった。グレックの目付きが変わった。目を細め、鋭い視線を兄妹に向けた。だが、それはほんの一瞬。直ぐにグレックは不思議そうな顔を作り、兄妹の会話に言葉を挟んだ。

「なんだか込み入った話のようだね」

「はい。実を言いますと、今お話したノーゲリング・ハーという異形は困った事にその姿を見た者が誰一人としていないのです。当家が発祥すると同時に屋敷の地下に封印されたと聞いてはいますが、屋敷の者達は恐ろしがって誰も地下には近付きませんし、行ったところで鉄の扉の向こうに封印されている為、その姿を見る事は出来ません。でも僕は、なんとかその正体を見極める方法はないものかと何度も地下に足を運んでいました。そうして今日、またいつもの

ように足を運んでみると、扉が開け放たれていたのです。しかし、封印の扉を開けられるのは母上だけでして……」

「つまり、君の母上がその異形を解き放ってしまったと？」

「いいえ、母上がそんな事をするとも思えません。きつと何者かが何らかの方法を使って封印を解いたのです。しかし、いずれは屋敷の者達も気付き、母上は屋敷の者達に恐れられる事になってしまいます。ですから僕達は母上の無実を証明する為、そして他の方が被害に遭う前にノーゲリング・ハーを捕まえる為、この辺りを探索していたのです。しかし……」

「思うようにいかないと？」

「はい。まったく不甲斐ないばかりです……」

アインは険しい顔で俯く。すると、グレックは腕を組み、森に目を向けながら言った。

「なるほど……という事は、あの黒い影がノーゲリング・ハーとか言う、その異形だったか……」

「えっ！、見たのですか！」

「断言は出来ないがね。しかし、黒い影を見たのは確かだ。とても邪悪な雰囲気放了た黒い影をね」

「本当ですか！、どんな形をしていました！」

アインは驚きながらグレックに詰め寄る。しかし、目は嬉々としていた。どうやら少年の中では好奇心の方が先立っているようである。そんなアインにグレックは中腰になり「まあ落ち着きなさい」と言つて、アインの少女のように細い肩を掴んだ。

「私が見たそれが君の言う異形だとは断言しかねるが、これだけは言える。私がこの森から感じた邪悪な気配の源は、間違いなくその黒い影からであったと」

「この森から感じた……？」

アインが不思議そうな顔を作ると、グレックは立ち上がり、どこか芝居染みた身振りで声を上げたのだった。

「おおっ、そうだ。私としたことが大事なことを言うのを忘れてい

た。私の名はグレック「C」シーファス、流浪の魔術師だ。こつちは我が最愛の妻であり助手のシェリル」

その途端である。アインは更に嬉々として声を上げた。

「すごい！、魔術師だなんて！、聞いたかいミリカ！、すごいよ！」

「お兄様、そんなに大喜びしては、はしたないです……」

「これを喜ばずにいられるかい！」

アインは興奮状態である。

ちよろいものだな……

グレックは小さくほくそ笑む。それからアインに紳士然とした態度で言った。

「我々は旅の途中、この森から邪悪な気配を感じ立ち寄ったのだが、なにぶん始めての土地、迷ってしまつてね……おかげで折角の一張羅はこの有様、その上、妻は旅の疲労が限界に達してしまい、こうしてここで休んでいたのだよ」

「なるほど、そういう事でしたか」

「どうだろう？、少し屋敷で我々を休ませてはくれないだろうか？、そうしてもらえれば、その異形の件に力も貸せるのだが……」

「ぜひお願い致します！」

アインは快諾し、ミリカの手を引きつつ湖の向こうに小さく見える屋敷へと二人を案内し始めた。グレックはシェリルを助け起こし、兄妹の後に付いてゆく。と、シェリルは怪訝そうにグレックの耳元に囁いた。

『グレック様、何をお考えで……？』

『まあ見ている。俺達は良い拾い物をしたかもしれないぞ……』

先程までの紳士然とした態度など何処へやら、グレックはニヤリと口元にいやらしい笑みを浮かべたのだった。

## 黒服の男

「署長っ！」

廊下から、けたたましい足音が聞こえたかと思うと、蹴破らんばかりに開かれたドアから聞こえた第一声が、その悲鳴にも似た声であつた。

茶色い革張りの椅子に腰を下ろし、最近出てきた腹を気にしつつも「これも紳士としての貫禄だな」などと、そんな独り言で運動不足の言い訳を自分に言つて聞かせながら、葉巻をくゆらせ、午前十時の紅茶を楽しんでいたワイズマン署長は、その声が聞こえた途端、驚きの余り口に含んでいた紅茶をブツと吹き出した。

「何事だ、騒々しい」

ワイズマン署長はハンカチで口を拭いながら、署長室に飛び込んできた警官二人を睨みつけてそう言った。だが、若い二人の警官の慌て振りには止まるところを知らなかった。

「あの追いかけていた夫婦のコソド口ですが、我々も全力を尽くしたのです！」

「署長の命令通り、全署員総出で包囲網を張つたのです！。天下のスコットランドヤードからの要請でしたし、そりゃあもうみんな張り切つて任務に就きました！」

本題がまつたく見えてこない二人の話に、ワイズマン署長は思わず、バン！、と机を叩いた。

「ええいつ、順序だてて話せ。要するに取り逃がしたのか？」

「ただ取り逃がしたただけなら良かったのですが……いや、良いという事もないんですけれども……」

両手で訳の分からないチェスチャーをしてしまうほどに取り乱しつつも、若い警官の一人は言いづらそうに言う。そんな様子にワイズマン署長は更にイラつく顔を見せながら、

「だからなんだ……！」

と、声を押し殺した。すると、若い警官は意を決したように声を上げたのだった。

「美しの森に逃げ込まれました！」

「なんだと！」

聞くと同時に、ワイズマン署長は椅子をひっくり返すほどの勢いで立ち上がった。

「お前ら、全署員総動員して何をやっていたんだ！」

「申し訳ありません！」

若い二人の警官は声を揃えて頭を下げる。するとそこに、開かれている署長室のドアの向こうから低く物静かな声が入ってきた。

「ワイズマン署長、どういう事かご説明いただきたいのだが……」

「バーノン・カミング……！」

黒いスーツに身を包み、山高帽を被った三十代そこその紳士は、二人の警官の後ろから影のように部屋に入ってきた。ワイズマン署長は、その男の名を苦々しい声と表情で呟いた。そして、椅子を直してそこにまたどっぷりと腰掛けると、まだ苦々しく答える。

「どうもこうもあるか。アンタに説明したところで理解など出来ないだろう」

「それでは説明になっていませんよ」

相変わらずの低く物静かな声ながらも、黒いスーツの男は鋭い眼光を署長に送った。

「アイツらが森に逃げ込んだ途端、あと少しというところで誰もが追うのを止めてしまった。この件に関する全指揮権は私にあると言うのに、誰に命令しても『署長の指示を仰がなければ』の一点張りだ。その説明を聞きたいと、私は言っているのですよ」

だが、ワイズマン署長は男の眼光に臆することなく、逆に睨み返して言うのだった。

「その前に私の方からも一つ質問があるんだがね、カミング君」

「バーノンで結構ですよ」

「ではバーノン君、改めて訊こう。君は本当にスコットランドヤー

ドの人間なのかね？」

「身分証はお見せしたはずですよ。疑うのなら問い合わせてもらっても結構」

すると、ワイズマン署長は更に鋭く黒いスーツの男、バーノンを睨みつけて言い放った。

「正直言つとな、気に食わんのだよ……！」

「……………」

「何の予備連絡も寄越さずに昨日、突然現れたと思ったら、ロンドンから二人組のコソドロを追いかけてきたから捜査に協力してほしいと言う。だが、協力要請とは言葉ばかりで二人組の手配書と窃盗という罪状だけ告げると、全指揮権は自分に寄越せだの、どんな犠牲を払っても絶対に逮捕しろだのといった命令口調と威圧的な態度。そして分からは、ロンドンからこんな田舎町まで追い掛けてこなければいけないほどの犯罪者であるにも拘らず、やってきたのは君一人とは、一体どういうことだ？」

「ロンドンは犯罪の多い街でしてね、スコットランドヤードと言えど人手不足なのですよ」

そうバーノンは目を細めて答える。と、すかさずワイズマン署長は声を上げた。

「それだ！、一番気に食わないのは君のその目付きだ！。とてもじゃないが我々と同じ警察官とは思えん。私の三十年余りにおける警察官経験を持つてして言わせてもらえば、そういう目つきをした種類の人間は二種類しかない。人殺しと軍……………」

と、そこでバーノンは片手を前に出し、ワイズマン署長の言葉を止めた。

「署長、一度出した言葉は引っ込めることは出来ませんよ。その歳ならば、それくらいの事は理解しているでしょう？」

「チツ、若造が……………」

ワイズマン署長は、それこそ苦虫を噛み碎いたような表情でバーノンから視線を外した。バーノンは、そんなワイズマン署長の様子



に口元にだけ笑みを浮かべると静かに言った。

「署長、私は貴方が想像しているような人間ではありませんよ。間違はなくスコットランドヤードの警察官です」

「どうだか……」

「私の事を信用できないのなら、それでも結構。しかし、この勅命書だけは信用してもらわなければ困りますね」

バーノンはスーツの内ポケットから丸めた一枚の紙を取り出し、広げて見せる。なんと紙質は、パルプ紙が主流のこの十九世紀末において古風にも羊皮紙であった。

「本物なのか？、などという愚問はよしていただきたいものですね」

「そのサインと紋章を疑う気など初めから無い。おいそれと偽造出来る物でもないし、羊皮紙が使われている時点で本物だと分かる。

だがな、それも気に食わん事の一つだ。なんでたかだかコソドロ二人の為に勅命書など下りる。しかも羊皮紙でだ。本来ならただ事ではないはずだ」

「さて、上の御方の考えている事など、私には図りかねます」

「こちらとしても協力している以上、ズバリ訊かせてもらうぞ。窃盗というのは別件だろう？、一体ヤツラの何を追っている？」

二人の間に空白が訪れ……そして、バーノンは今まででもっとも低く静かな声で告げる。

「それを貴方が知る必要はない……」

凄まじいまでの眼光であった。二人の若い警官は同時に思わず後退り、今まで強気に話していたワイズマン署長ですら息を呑んで押し黙ってしまった。

これ以上、何を訊いても無駄か……

ワイズマン署長の脳裏をそんな思いが過ぎる。そして、大きな溜め息を一つ吐き、愚痴るように呟いた。

「しかし、あの森に揉め事を持ち込んでおいて放っておく訳にもいかんか……」

ワイズマン署長は直ぐに若い警官の一人に声をかけた。

「おい、確かベルグソン夫妻は現在屋敷を留守にしているはずだっ  
たな？」

「はい。しかし、アイン様とミリカ様はそのまま屋敷に残っておら  
れるようです」

「あのイタズラボウズはともかくとして、ミリカ嬢が屋敷に残って  
いるのは厄介だな……仕方ない、モリアンのジイサンに頭を下げる  
か……」

「あの頑固執事が聞くでしょうか……？」

「敷地内に揉め事を持ち込まれる事はモリアンのジイサンにとって  
も都合は悪いはずだ。それにな、私は子供の頃、あの人とはクリケ  
ット仲間だった。見た目よりは話の分からないジイサンじゃないん  
だよ」

ワイズマン署長は小さく微笑んでウインクを送る。そして、立ち  
上がると署長らしい威厳を持って二人に命令を下した。

「現在、捜査に当たっている全署員の半分は美しい森の外で待機。  
残りの半分は万が一の事を考えてコソドロ共が町の外に逃げ出さぬ  
ように非常線を張っておけ。森の搜索許可は私が直接ベルグソン家  
に掛け合う。直ぐに馬車を用意しろ」

若い二人の警官は敬礼で答え、直ぐに署長室から駆け出していつ  
た。同時にワイズマン署長も立ち上がり、山高の警察帽を帽子掛け  
から取って被る。そして、厳しい表情と口調でバーノンに告げた。

「予め忠告しておくぞ。君が何者であろうとベルグソン家の事は私  
に任せ、君は首を突っ込まない事だ。命が惜しければな」

「そんな田舎貴族の家名など、聞いた事もないですけどねえ……」  
その途端であった。ワイズマン署長はバーノンの襟首を掴みそう  
な勢いで詰め寄った。

「そんな言葉、間違ってもベルグソン家の人間の前で吐くなよ……！」  
そうしてワイズマン署長は「ふんっ」と鼻を鳴らし、バーノンに  
背を向けて部屋を出た。だが、バーノンの口元には薄っすらと笑み  
が浮かんでいた。明らかに人を小馬鹿にする笑みであった。

## 伝説

執事モリアンは困っていた。

年齢七十を超え<sup>よわい</sup>る老齡にも関わらずピンと伸びた背筋。

曇りの無い眼光。

その眼光が向けられていた場所は、扉が硬く閉ざされた馬小屋であつた。腕を組み、何かを我慢しているかのように顔は真っ赤である。高血圧でよく倒れないものだと感じてしまうほどに。

その後ろには、メイドのメアリーが困った顔……と、言うより、呆れたような顔で立っていた。

すると、モリアンは思い切り息を吸い込んだ。そんなモリアンの様子に直ぐに気付いたメアリーは、ハツとした顔で素早く耳を塞いだ。モリアンは、我慢の限界が来たかのように更に顔を真っ赤にさせる……

「お前等いいかげんにせんか！。それでも由緒正しきベルグソン家に使える使用人か！」

馬小屋が震える程の大声であつた。扉の向こうから何頭かの馬の怯える鳴き声が聞こえた。それと一緒に、老若男女居る使用人達の怯える声が聞こえてきたが、その声はモリアンに対して怯えている声ではなかつた。

最初に聞こえてきた声は、あの若い大男の使用人ピーターのものであつた。もつとも、その声を聞く限りでは、とてもじゃないが大男どころか、虫の鳴く声よりもか細く小さい震えた声ではあつたが。「勘弁して下さいモリアン様。ノーゲリング・ハーが解き放たれているなんて……」

続けて誰も彼もが震えた声を上げる。

「わたしらは、みんなアイン坊ちゃんの事も、ミリカお嬢様の事も愛しています」

「この家に勤められる事だつて誇りに思っておりますとも……」

「でも、わたしらだって命が惜しいんです……」

モリアンとメアリーは、同時に深い溜め息を吐いたのだった。

今から三十分くらい前の事である。

ピーターからの報告を受け、モリアンはピーターを送り出した後、また玄関ロビーをうろつろしながらメアリーが地下から戻るのを待っていた。すると、間もなくして髪を振り乱したメアリーが戻ってきたのだった。

「どうしたメアリー？、お前が息を切らすなど珍しい事もあるものだな」

必死に息を整えるメアリー。

「お二人はどうした？、やはり見付からなかったか？」

メアリーは、息も切れ切れに答えた。

「モリアン様……一大事です……」

「まさか、地下でお二人の身に何かあったのか！」

「いえ、そうではなく……ノーゲリング・ハーの扉が開かれておりました……！」

「なんだと！」

モリアンは目を見開いて叫んだ。

「お二人は……お二人はどうした！」

「ノーゲリング・ハーを閉じ込めていた地下牢はもぬけの殻。お二人の姿はどこにもなくて……」

「なんという事だ……」

モリアンはよろめきながら後退る。そこにタイミング悪く現れたのが、庭では見付からないから全員で森の方を探してみる、という報告をしに戻ってきたピーターであった。

「た、た、た、大変だ……」

「コラ待てピーター！」

モリアンが止めようと声を上げた時には既に遅かった。ピーター

は庭に飛び出し叫んだ。

「ノーゲリング・ハーが逃げ出したぞ！」

一瞬、庭に出ていた使用人の誰もが耳を疑い、そして、この世の終わりでも来たかのような騒ぎとなった。

無我夢中で駆け出し転ぶ者。

何処に逃げていいのかも分からずにぶつかり合う者。

必死に神の名を唱えながら蹲うつすくまってしまう者。

そこで誰かが「とりあえず馬小屋に逃げ込め！」という叫びを発し、一同は馬小屋になだれ込んだ。当然、突然の出来事に馬達は怯えた悲鳴を上げて暴れ馬と化し、一緒に逃げ込んでいた厩番うまやばんが必死に馬達を宥める。外では顔を真つ赤にしたモリアンが喚き散らしてそれをメアリーが必死に宥なだめる。

人も馬も、まさに戦々恐々。メアリーだけが呆れたように深い溜め息を吐いていた。

しばらくして、やっと落ち着きは見せた。

しかし、その後もモリアンが搜索を続けるように何度説得しても使用人達は『命は惜しい』の一点張り。馬小屋の戸を硬く閉ざし立てこもってしまったのであった。

「モリアン様、とりあえず私だけでも森に行き、お二人を探してまいります」

メアリーは厳しい表情を作り、困り果てているモリアンの背中にそう言った。だが、モリアンは振り向き様に、すでに駆け出そうとしていたメアリーを慌てて引き止めた。

「待たぬかメアリー。一人で動けば命取りになる。解き放たれているのは得体の知れぬ化け物なのだぞ。それに、考えたくはないが、お二人とて……」

肩を落とすモリアン。だが、メアリーは強い眼差しで「大丈夫です」とキツパリ言い切った。

「ミリカ様は、このベルグソン家の後継者です。そんな簡単にやら

れるとは思えません。アイン様だつてきつと生きておられます。しかし、こうしている間にも、お二人が危険に晒されているのは事実。私は、お二人の世話係としての役目を果たさせてもらいます」

「待て、メアリー！」

モリアンの制止する声を振り切り、メアリーは森に向かって駆け出した。

その時であつた。

「ただいまーっ！」

なんと素直で澄み切った声であろう。湖から流れるそよ風に黄金色の髪を靡かせながら、その美貌の少年は意気揚々として弾むように姿を現したのだった。

「ただいま帰りました」

続いて、小さな胸にムームーと名付けたクマのぬいぐるみを抱いた美しい妖精のような白い少女が、美貌の少年と手を繋ぎ、おしとやかに言った。

「アイン様！、ミリカお嬢様！」

メアリーは、半ば泣き出しそうな声で二人に駆け寄ると、二人を抱き締めた。

「良かった！、ご無事だったのですね！」

その声を聞きつけ、ピーターを初めとした使用人達は、口々に二人が無事だった事を喜びながらやっと馬小屋から出てきた。と、そんな様子を見ながらアインは不思議そうに口を開いた。

「あれ？、みんなどうしたの？」

「どうしたもこうしたもありません！」

メアリーは二人の肩を掴み、怒る顔を作った。

「お二人共、あれほど行つてはいけないと言つたのに地下に行きましたね？。とぼけたって無駄ですよ。アイン様の部屋にノーゲリング・ハーを想像して描いた絵が何枚もあつたんですから」

「ああー……」

アインは気まずそうな声を出し、ミリカは小さく俯く。

「もうっ、どうしてそうなんですか！。どれほど心配した事か！。私なんかネズミと出くわしてしまつて大変だつたんですから！」

「最近、また森の野ネズミ達が増えてきたからね。でも大丈夫、僕が……」

「大丈夫じゃありませんよ。またみんなでネズミの駆除をしなきゃ……つて、それどころじゃありません！」

やっと本題を思い出したようである。

「ノーゲリング・ハーです！、扉が開かれています！」

「知ってるよ。でも大丈夫。僕達は森で凄い人達に出会つたんだ」

そう言つてアインは、後ろに立つ二人を紹介した。

「こちらグレックさんと、その伴侶であるシェリルさん。お二人はなんと魔術師なんだつて。力を貸してくれるつて」

興奮気味に話すアイン。だが、メアリーは険しい目付きで二人を見詰めた。

「とてもそんな風には見えませんが……」

そこにモリアンが現れ、グレックに口を開いた。

「私は当ベルグソン家に仕える執事、モリアンと申す者。申し訳ございませんが当家の主は現在外出中故、素性の分からぬ者を屋敷に招き入れる訳にはまいりません。お引取り願います」

同時にアインは「えー」と不満そうな声を上げる。すると、グレックはアインの肩にポンと手を置き、ニコリと微笑んだ。そしてモリアンに、紳士然とした態度で口を開いたのだった。

「モリアン殿がおっしゃる事もごもっともです。しかし、事は急を要するはず。これで身の証を立てましょう」

グレックは懷に手を入れ「ご存知なら良いのですが……」と言いながら銀色に輝くシルクの包みを取り出した。包まれていたのは、美しい飾り付けがされた真鍮の封蝋印。捺印部分には、十字架の上で二本の剣が交差している紋章が刻まれていた。

と、見た途端、モリアンは顔色を変えた。

「その紋章は、シーファス家の紋章……！」

「良かった、ご存知でしたか。私はグレック<sup>ㇿ</sup>シーファスと申します」

「これは、とんだご無礼を致しました」

モリアンは深々と頭を下げる。だが、グレックはにこやかに笑いかけた。

「そんな畏まらなくても結構ですよ。シーファスの家系は既に途絶え、ロンドンの屋敷も人手に渡っております。私もシーファス家に生まれたとは言え、騎士の身分ではありません」

「そうでしたか、もったない事です。三百年以上続く騎士貴族の名門と聞き及んでいましたが……」

「古い話ですよ」

「いや、ここで出会ったのも何かのご縁です。私の方から主に話してみましよう。当家はこう見えても王家とは少なからず縁<sup>ゆかり</sup>のある家系でございます。アイン様とミリ力お嬢様をここまで連れてきてくださったご恩もあります。お家再興に我が主も、きつと力を貸してくださいさるでしょう」

「お気遣いは無用ですよ。妻シエリルとの流浪の身の気楽さを、今、私はとても気に入っておりますので」

「そうでしたか。しかし、もったいない事ですな……」

やれやれ、また随分とおせっかいなジイさんだな……

そうグレックは呆れたが、表情はにこやかなまま「まあ、そんな事より……」と言つて話を切り替えた。

「ノーゲリング・ハーとか言う化け物の件、詳しい話をお聞かせ願えないでしょうか？。少々訳あつて私には魔術の心得があります。きつとお力添え出来ると思います」

と、モリアンは一変して厳しい表情となり言うのだった。

「他言無用でお願いできますかな？」

「もちろんです」

グレックは力強く答える。と、同時にアインは、何か期待に満ちた目でグレックを見上げて嬉しそうに飛び跳ねた。



モリアンの案内の下、グレックとシェリルは屋敷の客間へと通された。両開きの大きな扉が開かれると、二人は同時に感嘆の声を上げたのだった。

「これはまた見事な……」

「素敵ですわ……」

客間と呼ぶよりはホールと呼んだ方が相応しいくらいに広い部屋。床には赤い絨毯が敷かれ、大きな窓からは中央に噴水がある広い緑の庭園が一望出来た。扉の側には甲冑が飾られ、周りに飾られた見事なまでの調度品の数々は、この家の歴史を感じさせた。そんな中で一番に目を惹いたのは、上座に飾られた金色の髪をした美しい女性の肖像画であった。

「この方が……？」

「母上です」

グレックの肖像画を見上げながらの質問に逸早く答えたのはアインであった。続いてモリアンが、その名を恭しく口にする。

「当ベルグソン家の主、マザー＝ベルグソン様にございます」

「マザー？」

「ベルグソン家は代々女性が家督を継ぐものとされ、継ぐ際には古き名は捨て、マザーの名を継ぐ事となっておるのです」

「と、言う事は、跡目はミリカ嬢が？」

「左様でございます」

答えた後、モリアンは二人をソファへと案内した。七、八人くらい裕に座れそうなソファへ、アインとミリカは窓を背に座り、木目の美しい大きなアンティークテーブルを挟んでグレックとシェリルが座る。その真ん中にモリアンは立つと、

「それでは、まずベルグソン家の歴史からお話いたしましょう。その方がノーゲリング・ハーの事に関しても分かりやすいと思いますので……」

そう話を置いた後、静かに語りだした。

「この地にベルグソン家が始まったのは、およそ十二世紀の頃だと主からは聞かされております。当時、この地は今のよう美しい土地ではなく、人外の魑魅魍魎が跋扈する魔界であったと聞きます。それを国の危機と見なした王家は討伐を試みました。しかし、帰って来る者は誰一人としておらず、そこに白羽の矢が立ったのが、このベルグソン家なのです。なぜなら、当時よりベルグソン家に生まれし女には魔女の力が備わっていたからです」

「魔女……」

グレックは険しい顔付きで呟く。

「かくして初代マザー」ベルグソンはこの地に平和を築いたのですが、化け物達の頭領であったノーゲリング・ハーだけには力及ばず、この地の地下深くに封印するまでが精一杯だったようです。その封印された場所の上に建てられているのが、この屋敷というわけです」  
「それが逃げ出してしまった、と……」

「しかし、アイン様から既にお聞きのことと思いますが、あの扉は奥様しか開けられぬ扉。一体どういう事なのか……しかも相手は正体も分からぬ化け物、どうしていいものか我々も困り果てている次第でございます」

「なるほど……」

グレックは小さく頷く。と、同時に扉をノックする音が聞こえ「失礼します」とメアリーが紅茶を持って部屋に入ってきた。だが、メアリーがテーブルに紅茶を配ろうとすると同時に、グレックは立ち上がり言うのだった。

「お嬢さん、折角だが紅茶は事が済んでからゆつくりと頂くとしよう。モリアン殿、早速だがその地下へと案内してもらえないだろうか。さすれば、化け物の正体も……」

言いかけたその時であった。突然、耳をつんざくような悲鳴が上がった。逸早く飛び出したのはメアリーであった。女とは思えぬ身のこなしで束ねている赤毛を靡かせながら駆け出してゆく。その後ろを追いかけるようにグレックとシェリル、アイン、ミリカ、モリ

アンの順に駆け出した。

悲鳴は屋敷の外からだった。メアリーは厨房へと回り、裏口から屋敷の外に出る。

と、外には既に使用人達が集まり、悲鳴が上がった場所は一目瞭然であった。裏庭に掘られた井戸の側である。ただ、集まっている使用人達の中で、いつも頭一つ抜き出て目立つピーターの姿だけが見えなかった。

「まさか……！」

メアリーは駆け出し、使用人達の中に割って入る。と、そこに倒れていたのはやはりピーターであった。ピーターはバケツを片手に白目を剥き、泡を吹いて倒れていた。

「おおピーター、何という事だ！」

後ろから、悲鳴にも似たモリアンの声が上がる。だが、メアリーは慌てずにピーターの側に膝を落とすと、冷静な表情で腕を取り、脈を確かめた。

「モリアン様、命に別状はないようです。恐らくは気絶しているだけかと」

モリアンや使用人達は安堵の息を漏らし、アインはミリカと顔を見合わせて誰よりも安堵した顔を見せた。しかし、そんなものを打ち砕くかのように大きな声を上げたのは、グレックであった。

「遅かったか！、バケモノめ！」

どこか演技染みている……

「モリアン殿、犠牲者が出てしまった以上、もう一刻の猶予もありません！。後は私達に任せ、モリアン殿達はアイン君とミリカ嬢を連れて町へ避難した方がよろしいでしょう」

モリアンは「ふむ……」と考える様子を見せたが、使用人達に向かい直ぐに口を開いた。

「お前達はアイン様とミリカお嬢様、それにピーターを連れ町へ避難しなさい。町へは森を抜けず、湖を回って一度街道に出た方がいいだろう。遠回りにはなるが今の森を抜けるよりは安全だ。町に出

たらピーターは念のため医者に診てもらえ。私は奥様よりこの屋敷の留守を預かっている身、死んでも屋敷は守り抜かなければいかん」だが、そこにアインが声を上げた。

「僕は残るよ。ベルグソン家の長男として」

美しい青い瞳には、確固たる意思が伺えた。

「お兄様が残るのであればミリカも残ります」

ミリカは兄の手をギュツと握る。当然、メアリーも声を上げるのだった。

「お二人が残ると言うのであれば私も残ります。世話係としての役目を果たさせてもらいます」

まあ、問題は無いな……

グレックは人知れずほくそ笑んだ。

## 好奇心

その部屋に設置された天蓋付きてんがいの大きな白いベッドは、窓から差し込む日差しに照らされてキラキラと輝いていた。

窓には純白のレースカーテンが掛かり、部屋の隅に置かれたテーブルの上の白い陶磁の花瓶には、赤いバラの花が生けられている。その横には可愛らしいフランス人形が、窓辺にはウサギやヒヨコ、少女を象ったぬいぐるみ達が飾られていたが、この部屋の主であるミリカの胸の中に抱かれていたのは、やはり一番のお気に入りであるクマのムームであった。それは、ミリカが生まれた時に母がお守り代わりにと贈った一番最初の誕生日プレゼント。手縫いであった。

ミリカはソファに座り、隣りに座る美貌の兄に本を読んでもらっていた。読み慣れた雰囲気で兄が読む本に、ミリカは静かに耳を傾けている。

だが、兄は少々違うようだった。

読み慣れた口調ながらも、どこかそわそわとした雰囲気が声に滲み出ている。

と、不意にアインは読むのを中断してしまった。ミリカは不思議そうな顔で兄の顔を見上げる。同時にアインは言った。

「ねえミリカ、気にならないかい？」

「何がですか？」

「グレックさん達だよ。魔術というものを見てみたいと思わないかい？」

地下への入り口まで案内されるとグレックは、精神を統一させたのでここからは二人きりで行かせてほしいと言って、シエリルと共に地下へと向かってしまったのだった。そして、万が一ノーゲリング・ハーが入ってきた時の事を考え、モリアンはロビーで玄関を見張り、メアリーは裏口を見張り、兄妹は部屋でジツとしているよ

うにモリアンに言いつけられていたのである。

「いけません、お兄様。言いつけられた事は守らないと」

「でもねミリカ、人類は禁断と呼ばれる地に入って行ってあらゆる発見をしたんだ。好奇心を持つ事は悪い事じゃないと父上も言っていたよ」

「だけど、ばれたらまたメアリーに叱られます。それにノーゲリング・ハーだって、いつ襲ってくるか分かりませんのに……」

「ミリカ、恐れていたら何も掴む事は出来ないよ。ミリカだって見てみたいだろ？、魔術というものを」

「それは……少しは……」

「じゃあ決まりだ」

アインは本を置き、スクツと立ち上がってミリカに手を差し伸べた。

「行こう、ミリカ」

「ミリカのこと、守ってくださいね……」

「当然じゃないか」

アインはその美貌に微笑を湛え、妹の手を力強く握った。

そうして兄妹は、音を立てないようそつと部屋を出て、深淵の闇へと向かったのだった。

## 地下牢にて

グレックは、長い回廊を下りて辿り着いた地下牢のレンガの壁を、ランプの仄かな明かりだけを頼りに隅から隅まで舐め回すように観察していた。時折、何かを確かめるように壁を撫でたり叩いたりしている。

そんな様子を後ろから見守るミシエルは、少しイラつきながら口を開いた。

「グレック様、そろそろお話してもらってもよろしいでしょうか……？」

ここに来るまでの間、グレックはミシエルに何を訊かれても答えずにいたのだった。

「一体、何が狙いなのです……？」

しかし、グレックは何も答えず、ただひたすらに壁を観察し、調べている。そんな様子のグレッグにシエリルは溜め息を吐き、いいかげん苛立ちが表情に浮かび始めていた。

と、不意にグレックは、入り口正面の壁の一部分で動きを止めると、ようやくシエリルに振り返り、口を開いた。

「なあシエリル、彼等が言うノーゲリング・ハーなんて化け物、本当に居ると思うか？」

「えっ？」

突然の質問にシエリルが思わず面食らった顔を見せると、グレックは大笑いした。

「おいおい、まさか本気で信じていたのか？。そんな誰も見たことの無い化け物の話など、信じるに値する話じゃない」

「しかし、あの執事が言うには……」

「先祖が魔物を倒したただの、ドラゴンを倒したただの、この手の地方領主の家なら何処にでも転がっているようなおとぎ話だ、珍しくもない」

「では、この家の女子が魔女の力を持つというのも……」

「俺達はミリ力嬢に何か力とやらを見せてもらったか？、アインや執事は見た事があると言っていたか？。この家の主に、それらのおとき話を信じさせられているだけだ」

「では、ここには……！」

「そうだ。さすがは我が妻、カンが良いな」

二人は顔を見合わせ、ニヤリと笑う。

「俺はアインからノーゲリング・ハーの話を聞いた時にピンときていた。恐らくは、この地下牢にある何かを守る為のホラ話だとな。そして今、確信が持てた……」

グレックは、腰に隠し持っていた短剣を引き抜く。とても細かい装飾が施された美しい短剣。その柄でレンガの一部分を叩いた。すると、叩かれたレンガは簡単に抜け落ち、なんと、何の変哲もなかった壁は土煙を立てて一気に崩れ落ちたのだった。

「貴族が守る物と言えば二つしかない。メンツか……」

おたから  
「財宝……！」

現れたのは小さな空洞。そこにあったのは、様々な宝石で装飾されたきらびやかな箱。フタには鍵が付いており、硬く閉ざされている。それはまさに、誰が見ても疑いも無いほどの立派な宝箱であった。

「さて、拝見させてもらうか」

言いながらグレックは宝箱を引き出す。そしてミシエルに「出るか？」と尋ねた。

ミシエルは眼鏡を直しながら「お任せ下さい」と言うと、髪の中から小さな針金を取り出し、宝箱の鍵穴に針金を挿し入れた。息を呑み、期待に満ちた目でその様子を見詰めるグレッグ。

だが、なぜかミシエルは直ぐに手を止めてしまった。

「どうした？」

ミシエルはまた眼鏡を直し、改めて宝箱を確認するように見詰めると、怪訝な顔でグレックに振り返りながら言った。



「この箱、すでに開いております……」

「妙だな……」

グレックは宝箱を開ける。と、同時に二人は驚きを隠せぬ顔を見せた。

「グレック様、これは一体……？」

グレックは宝箱の中身を手に取り、それをランプの明かりに照らす。と、小さく声を上げた。

「なるほど、そういう事だったか……！」

そして、溜め息混じりに小さく呟いた。

「哀れなものだな……」

その時であった。

「すごい！、この地下牢にこんな仕掛けがあったなんて！」

グレックとシェリルが振り向いた先には、美しい兄妹が立っていた。

まずい所を見られたな……

「よく分かりましたねグレックさん！。これも魔術の力ですか？」

新しい玩具を見つけたかのように目を輝かせて言うアイン。そんな言葉に、グレックは込み上げてきた笑いを必死に押し殺した。

まったく、この少年はどこまでお人好しなんだ……

だが、アインはニコニコしながら言うのだった。

「でも、訂正はさせてもらいますよ。ノーゲリング・ハーの伝説も、ベルグソン家の魔女の力も、すべて真実です」

グレックの目に殺気が宿った。

「……なんだ、最初から聞いていたのか。随分と人が悪いんだな」

「入口の影に隠れて、いつ魔術を使うのかとミリカと二人でドキドキしながら見ていたんですけどね」

ニコニコとした表情を崩さないアイン。そんなアインを睨むグレック。そこに、兄妹の背後から声が上がった。

「あっ！、やっぱりここに居た！」

メアリーであった。

「まったくもう！。お部屋に様子を見に行ったら居ないんですから！。魔術に興味があるのは分かりますが、グレックさん達の邪魔をしてはいけません！」

アインは、ニコニコとした表情をグレックに向けたままメアリーに告げた。

「ごめんねメアリー。でも、どうやら僕の見当違いだったようだ。二人は魔術師ではなく、泥棒だったみたいだよ」

「えっ……！」

「だからピーターが倒れた時に大袈裟に騒いで、避難という名目で人払いをした。盗る物を盗った後、逃げやすいようにね。僕やミリカ、女中<sup>メイド</sup>に老執事が相手なら何とでもなる、そう思ってたんですよ。ねっ？、グレックさん」

「まったく、君は……」

グレックは苦笑を浮かべた。

その横から、シェリルが一步前に踏み出し、ゆっくりと眼鏡を外した。

「グレック様、騒がれては面倒です。少し大人しくしててもらいましょう」

露わになった眼光には、獲物を捕らえる時の猛禽類の光が宿っていた。

そのシェリルは、ワンピースのスカートの内側に縫い付けてあった隠しポケットから、ある物を取り出した。それは、黒い指貫の皮手袋。ギチギチと、音を立ててそれを手にはめるシェリル。良く見れば、皮手袋の拳の部分には、赤茶げたシミが見てとれた。

血糊が語る、明らかなまでの殺意……

「それでも私は東洋の武術の心得があるの。一瞬で眠らせてあげるから下手な抵抗はしない事ね。余計に痛い思いをする事になるわ」すると、そこで前に出たのはメアリーであった。メアリーは兄妹を庇うように前に出ると、シェリルを睨みつける。そこには、赤毛にそばかすの少女の面影など何処にも無かった。

「アイン様、ミリカお嬢様、はしたない所をお見せします事をお許し下さい」

そう言っただけ、ミアリーは、エプロンと頭のプリムボンネットを取る。そして、ワンピースのスカートを破ってミニスカートのような形にした。

と、そんなミアリーに、ミリカは心配そうな目をして言うのだった。

「ミアリー、乱暴はいけませんよ」

「本当にお優しいですね、ミリカお嬢様は」

ミアリーはニコリと微笑んだ。

「身のこなしから、ただのメイドじゃない事くらいは分かっていたわ。世話係兼ボディガードと言ったところかしら？。でも無駄よ。私は何度も修羅場を経験し……」

一瞬であった。シエリルの言葉を遮るように、彼女の目の前を風が横切った。次の瞬間、シエリルの横の壁のレンガの一つが砕けた

……

いや、破裂した。

そこにあつたのは、ミアリーの脚線美。

当たれば間違いない首の骨を折る蹴りの一撃であつた。

「次は当てます」

殺気と共に言い放つミアリー。

シエリルは脱兎の如く後退った。

「グ、グ、グレック様、あの女、人間じゃありません！」

すると、ミアリーは腰に手を当て、少女に戻って怒ったのだった。

「失礼な、私はれっきとした人間の淑女<sup>レディ</sup>です」

そこに再び声が上がった。相変わらず大きいモリアンの声だった。

「居たな賊共！、ワイズマンから全て話は聞いたぞ！」

モリアンの後ろにはワイズマン署長と若い警官が二名、それにバーノン・カミングの姿が見えた。その時である。今度はグレックの目付きに凄まじいまでの殺気がこもった。殺気をぶつけていた相手

は、バーノンであった。

「鬱陶しいのが来たな……」

グレックは、ぼそりと呟く。だが、バーノンが殺気立つ事はなく、無表情にグレックに視線を送っていた。冷血漢、という言葉があまりにも似合いすぎる程の目付きで……

「さあ貴方達、観念なさい」

メアリーがグレック達に言い放つ。するとグレックは、またぼそりと呟いた。

「仕方ない、趣味じゃないんだが……」

グレックはシェリルに視線を送る。それに逸早く気付いたメアリーは、グレックを取り押さえようと飛び出す。

が、一瞬グレックの方が早かった。グレックは足元にあった崩れ落ちているレンガの一つを蹴り飛ばす。狙いはアインであった。アインの美しい顔目掛けてレンガが飛ぶ。だが、メアリーも一瞬で反応し、飛んできたレンガを蹴り碎いた。

しかし、レンガが飛ぶと同時に疾風の如き速さで飛び出したのはシェリルであった。シェリルはメアリーの横を擦り抜け、素早くミリカをさらい、飛び退いたのだった。

「ミリカ……！」

「お兄様！」

ミリカは、さらわれた拍子に取れた青いリボンだけを残して兄の横から消えた。

「卑劣な……！」

メアリーは、憎々しげにグレックを睨んだが、グレックは事も無げに言い放った。

「形勢逆転だな」

そして、腰の短剣を引き抜き、その刃をミリカに向けた。

「この妖精のように可愛らしいミリカ嬢を傷物にしたいにければ、大人しく道を開ける」

グレックとシェリルは前に出る。メアリーは憎々しげに睨みなが

らも、成す術も無くアインをガードする格好で後退る。そんな状況の中、誰よりも慌てていたのは何故かワイズマン署長であった。いや、厳密には取り乱していると言った方が正しいだろう。それ程の慌て振りであった。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待て！。貴様、今自分がやっている事をよく、よく考えてみる！。悪い事は言わん、命が惜しければ、今直ぐミリカ嬢を開放しろ！」

と、そこに高らかな笑い声が上がった。バーノンであった。

「署長にしては、良い事を言いますな」

バーノンは、右手をスーツの懐に入れる。

「バーノン！、貴様、何をする気だ！」

明らかに懐で拳銃を握っている手付きを見せつつ、冷たい視線はグレッグに向けたままバーノンは無表情に答える。

「どんな手を使っても連行してこいという勅命なのですよ」

そこに、グレッグが苦笑を浮かべた。

「勅命まで下したか……王家は何処まであんな下らぬ伝説<sup>モ</sup>を追いかけるつもりだ？」

「さてな……俺は、たとえ殺してでも連れて来いという勅命に従っているだけだ」

「殺してでも、か……」

グレッグは、その言葉を皮肉っぽく吐き捨てた。

「ミリカ嬢に当たったらどうする気だ？」

「グレッグ、そんな事を私が気にする人間だと思っているのか？」

その言葉と同時にワイズマン署長が、

「貴様！」

と、怒りに駆られ拳を振り上げた。しかし、一瞬早く黒い袖がバーノンの腕を掴んだ。モリアンであった。

「当家の屋敷内において、そのような物騒な物を出すのは止めていただきます」

なんだ、このジジイ……！

掴まれた腕を、バーノンはピクリとも動かす事が出来なかった。

ふと気が付くと、アインはまたニコニコとした表情を浮かべていた。そんな表情をアインはミリカに向け、にこやかに言うのだった。「ミリカ、力を使ってもいいよ」

「アイン君、申し訳ないが君達のおとぎ話に付き合っているヒマは無いんだよ」

「言ったはずですよ、グレックさん。ベルグソン家の魔女の力は真実だと」

そこで、ワイズマン署長が再び慌てふためいた。

「こ、こらボウズ！、何を言い出す！」

「今は非常事態ですよ、署長」

アインはワイズマン署長に微笑みを向ける。

するとそこに、シェリルの腕に抱えられ捕まっているミリカが小さな声で兄に言った。

「でもお兄様、ミリカはお母様に、人前では力を使ってはいけないと、きつく言いつけられています……」

「言っただろミリカ、今は非常事態だって」

そう言われると、ミリカは可愛らしく首を傾げ、少し考える素振りを見せたが、

「……お母様には、ちゃんと説明してくださいね」  
そう言って目を瞑った。

と、同時である。ミリカの体からは火のように真つ赤な光が吹き出し始め、周囲を昼間のように照らし始めた。その次の瞬間、ミリカの小さな手の中には炎が生まれた。そして、それは輪となり、ミリカの体を取り巻いたのだった。

見る者に驚くヒマすら与えぬ程の、それは一瞬の出来事だった。何が起こったか理解が出来ぬまま、シェリルはパニックに陥った悲鳴を上げてミリカを離れた。

それと同時に、アインは「メアリー」と呼びかけた。しかし、メアリーは「はい」と返事をするよりも早くグレックとシェリルの後

るに回り込む。そして、二人の首根っこ掴み、そのまま地べたに押し倒して押さえ込んだ。

同時に、ワイズマン署長も二人の警官に命じ、二人の警官は素早くグレックとシェリルに飛び掛かり、腕を後ろに締め上げて手錠を掛けた。

「グレックさまぁ……」

地べたに這いつくばる格好で、情けなく愛する夫の名を呼ぶシェリル。

「そんな顔をするな。美人が台無しだ」  
グレックは妻に優しく微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2649m/>

---

ノーゲリング・ハー

2010年10月13日19時57分発行